

中国文化財返還運動 を進める会 ニュース

№ 8

中国文化財返還運動を進める会 <https://cbunkazaihenkan.com/> **2024/10/23**

〒105-0003 東京都港区西新橋 1-21-5 一瀬法律事務所 / TEL. 03-3501-5558 / Mail: info@ichinoselaw.com

***本会にぜひ入会を！ カンパを！** 郵便振替：00120-7-636180（中国文化財返還運動を進める会）
正会員年会費（個人）1000円・（団体）3000円／賛助会員（個人・団体）1口1000円（1口以上）

7月27日、進める会の総会と 講演会を開催しました。



文京区民センターで開かれた講演会

進める会では、第3回総会と講演会を、2024年7月27日（土）の夕方から、東京・春日の文京区民センター会議室で開催しました。

2023年度の活動報告

*第2回総会と講演会の開催

昨年4月22日に開催された第2回総会は、同日の講演会に先立って行われています。講演会は、森本和男さんの「世界の返還運動の現状」、および瀬瀬厚さんの「帝国日本の軍事戦略と文化侵略」でした。これらの講演録は、6月に発行された『世界史のなかの文化財返還』（ブックレット No. 2）に掲載しました。

*靖国神社との面談

その後、5月18日には靖国神社・総務部長（禰宜）、総務課長（権禰宜）と面談し、7月26日に中国由来の文化財の返還に関する要望書（二次）を提出しました。8月9日には「神社側でお伝えすべき進展はなく、今回の面談は見合わせたい」との回答が届きましたが、私たちは10月4日に再度、中国由来の文化財の返還に関する要望書（三次）を提出しました。この三次要望に対する回答が10月18日に届き、そこには①『靖国神社百年史 資料編 中』（1983年）に掲載の賀茂百樹「天覧の光栄に輝く靖国神社狛犬のこと」（『皇国時報』1938年 国家神道下）以外の資料はない。②文書にて訪中された際の状況等を知らせて欲しいとあり、以降の面談が実現していません。なお、私たちの訪中報告と中国由来の文化財の返還に関する要望書（四次）は11月30日にお送りし、12月13日にそれに対する回答を受け取りましたが、それは三次要望への回答内容の繰り返しでした。

神社側の見解によると、「狛犬」は寺守の承諾を得、相当の代償を払って入手したものと理解している。従って、戦利品とは考えておらず、現状では返却することは検討していない。ところが、代償を払った資料があるかの問いに、それを裏付ける資料は確認していない、と主張しています。また、境内にある狛犬では最古の狛犬であり、奉納台帳にも記載があること、インターネットなどで話題になっている知名度の高い狛犬であり、無名の北関大捷碑が返還されたのとは異なるとしたうえで、返

還するとなれば世間の納得、承認が必要としています。

さらに靖国神社では、天皇の勅使が年に2回参向する勅裁社であって、宮内庁との関係など、様々な課題があり、現段階では還す、還さないについては言及できないとしています。

*** 訪中交流調査ツアー**

8月12日～18日、中国遼寧省鞍山市海城、大連市旅順を中心に調査と中国研究者や民間団体との交流を、会員有志で行いました（「ニュース」6号参照）。

*** 11.11 集会**

井上亮さんの講演会を開催し、「知られざる皇居の慰霊施設『御府』」を話していただきました。集会では、新孝一さんが「訪問団の概略」を訪中報告として、また東海林次男さんが「三学寺狛犬をめぐって」お話しされました。

*** その他の活動**

「ニュースレター」NO. 5を2023年7月19日に、同NO. 6を10月10日に発行し、ブックレットは、『世界史の中の文化財返還 未決の植民地主義を超えるために』を11月11日に発行しました。また、返還運動を進める会の例会は、ほぼ月一回のペースで実施しています。

山縣有朋記念館へは、昨年度に続き配達証明便を送ったが、回答が得られていません。また、木村聡さんにより「不謹慎な旅 第67回 戦利品は黙って吠える 石獅子と御府」と題する記事が『週刊 金曜日』2024年1月19日に掲載され、進める会の活動が紹介されました。

2024年度の活動方針

*** 3つの文化財の返還を求める**

私たちの会は、今年も戦前の日本が中国から奪った文化財を、それぞれ「元の場所に戻す」という返還運動を進めます。

第1の文化財は、日本が1894～95年の日清戦争で中国から奪った「石獅子」です。現在、これは東京の靖国神社に一对2体が、また栃木県の山縣有朋記念館に1体が設置されていますが、いずれもその元の場所である遼寧省鞍山市海城の三学寺に返還することを求めてきました。なお、会ではこれまで「狛犬」という呼称も使用してきましたが、これからは「石獅子」と称します。

第2の文化財は、1904-5年の日露戦争終了後に中国の大連市旅順口から日本に運び込まれた「鴻臚井碑（唐碑亭）」です。これは現在まで、皇居吹上御苑内に国有財産として非公開で設置されています。これも、昨年来宮

内庁との交渉を続けており、是非とも元あった場所に返還するように求めています。

第3の文化財は、東京大学に所蔵されている渤海国の文化財と、東大・東洋文化研究所の入口に展示されている一对の石獅子です。東亜考古学会が発掘した渤海国関係の発掘品を、現在東大考古学研究室が所蔵し、その一部は東大総合研究博物館で展示されています。また、一对の石獅子は戦前から大塚の東方文化学院にあった来歴不詳のもので、いまそれが東大・東洋文化研究所の入口に何の説明もないまま堂々と展示されています。

この2件に関して、まずは来歴を明らかにすべきと考えています。

*** 署名運動への取り組み**

私たちの会では、これらの文化財返還を実現するために、賛同署名を始めます。また、返還実現のために、国会議員、省庁、大使館などへの働きかけを強めて協力を求めています。

*** その他の活動**

全国でこうした返還運動への理解を広げて運動を強化するため、引き続き集会を開催します。

また、私たちの会の運動は、他団体との活動との連携・連帯を通して発展させていきたいと考えています。現在、「韓国・朝鮮文化財返還問題連絡会議」や「大阪城狛犬会」等の文化財返還の先進的な取り組みが展開されており、これらの市民団体との連携を強めていくと同時に、中国国内でも日本に文化財返還を求めている研究者・団体と連絡を取りながら、その交流、連携・連帯を図ります。

最後に、会の運動を進めるうえで、これからも会員拡大と財政強化に努めていきます。当会のホームページを一層充実させます。皆様が訪問して下さるようよろしくお願いします。

*

この日の総会は、以上の議事報告と財政報告とを参加した会員らの拍手で確認して約30分で終えて、「中国文化財返還運動を大きなうねりに！ 7.27集会」に移りました。共同代表の藤田高景さんの開会のあいさつにより講演集会が開始され、2つの講演が行われました。ひとつは、会員の吉田邦彦さんによる「中国文化財返還の現状と課題——特に東京大学東洋文化研究所玄関前の石獅子について」、および共同代表の一人である五十嵐彰さんの「東京大学総合研究博物館が所蔵する東亜考古学会発掘資料」です。現在、これらの講演内容と、当日の集会発言などを文字に起こして掲載した「ブックレット No. 3」の刊行を準備しています。

(大賀 英二)

東京大学に対して要望書を提出

前稿にもあるように、私たちは東京大学に所蔵されている渤海国の文化財と、東大・東洋文化研究所の入口に展示されている一対の石獅子にたいする返還および、その来歴を明らかにするよう求める行動を新たに開始しています。

7月27日の総会・集会に先立つ25日、会では、東大の3つの機関（国立大学法人東京大学・東大総合研究博物館・東大東洋文化研究所）宛に、別掲の要望書（申し入れ書）を、三者それぞれに対して送付しました。

10月現在、文書に対しての正式な回答はありませんが、その後の私たちの問い合わせに対しては、「東大本部法務課で対応する」、「回答するかしないかも含めて検討中である」というまったく後ろ向きな態度でした（9月17日・東文研担当者）。

また、私たちは、東文研の石獅子に対して、その入手の経緯などが明らかになるような文書の開示を求めて、10月4日に情報公開請求も行っています。これらについても、動きがあり次第お知らせします。

（新 孝一）

中国由来の文化財の返還に関する要望書

国立大学法人東京大学

総長 藤井 輝夫 様

東京大学総合研究博物館

館長 西秋 良宏 様

東京大学東洋文化研究所

所長 中島 隆博 様

中国文化財返還運動を進める会

共同代表：五十嵐 彰（慶応義塾大学非常勤講師）、瀬瀬 厚（山口大学名誉教授）、東海林 次男（東京都歴史教育者協議会副会長）、藤田 高景（村山首相談話の会理事長）

2024年7月25日

以下の事柄について要望いたします。

記

私たち「中国文化財返還運動を進める会」は、不当に持ち去られた中国由来の文化財について、元の場所に返還することを目指して運動を進めている団体ですが、現在東京大学が保管している中国由来の文化財の返還に関して、貴大学・貴機関に対して、以下の通り要望します。

1 現在、東京大学本郷キャンパス内にある東大総合研究博物館は、旧「満洲国」で発掘された渤海（698 - 926）の文物の一部を公開展示しています。またこれらの文物は、総合研究博物館の他にも、東大の考古学研究室にも所蔵されていることが、同館のHPなどで明らかにされています。これらは、1933年・34年にかけて、原田淑人や駒井和愛（両名とも後に東大教授）ら「東亜考古学会」メンバーならびに、軍人であった斎藤甚兵衛（優）が、渤海の都であった「上京龍泉府」や半拉城（「東京龍原府」）から発掘したものです。前者の発掘は、「外務陸軍両当局の熱誠なる支援」を受けて行われ、後者も「満洲国」の「建国十周年記念事業」とされていたことなどが歴史的に明らかにされています。東大にもたらされたこれらの文化財は、日本の中国侵略・植民地支配の産物であり、まさに不当な発掘行為であったと言わざるを得ません。中国の研究者も、日本の植民地支配のもとで奪い去られたそれらが、今もなお、そのまま東大に置かれ続けていることに、強い批判の目を向けています。

これらの文化財は、中国東北地方から朝鮮半島にかけて存在していた渤海についての貴重な史料であり、日本の侵略・植民地支配を証しだてるものに他なりません。しかし東大総合研究博物館の展示においては、「（渤海の）歴史には不明な点が多く、20世紀初頭以来、原田淑人はじめ本学の研究者らが考古学的調査を実施してきた」と解説板に記されているだけです。その「考古学的調査」が、日本の軍隊に守られながら行われたものであり、調査自体が侵略者による文化収奪に他ならないという事実には一切触れることなく、総合研究博物館に堂々と展示している、そのことが何ら問題であるとは、考えておられないようです。こうした態度に、かつての研究者の植民地主義的な「学術」のありようが、現在の東京大学においても、そのままに引き継がれていると言わざるを得ません。

現地の合意を得ず、あるいは非対称的な権力関係のもとで不当に国外に持ち去られた文化財について、脱植民地主義の視点から、それを「本来あった場所に戻す」ことによって、文化財本来の価値を取り戻すことは、今世界的に求められていることです。このことについては、貴大学ならびに貴職におかれましても、十分にご承知のことと存じます。現在東大が所蔵している、渤海の文物をはじめとする中国由来の文化財について、東大は早急に関係諸機関と交渉を行ない、現地への返還に向けた具体的な行動に着手することを求めます。

2 同じく本郷キャンパス内にある東洋文化研究所の建物の門前には、北京から持ってきたとされる一対の石獅子が、シンボルとして置かれています。東洋文化研究所の前身である東方文化学院が、「北清事変」の賠償金によって設置されたという歴史的な経緯もあり、私たちはこの石獅子の由来についても、不当な手段で収奪されたものではないかという問題意識を持っています。

これについて、当会の動きに関心を寄せる研究者が、5月23日に中島隆博・東洋文化研究所所長と私的に面談した際、当該獅子像は「正当な手続き」で入手されたものであり、それを裏付ける資料もあるとの説明を受けています。にもかかわらず、その資料を開示することについては拒否されました。歴史的事実の究明のために、明らかにされるべき資料を独占し、根拠を示さずに結論だけを述べようとする閉鎖的な態度は許されません。東洋文化研究所は関連する資料を直ちに公開してください。そして事実に基づいて経緯を明らかにし、返還すべきものは返還することが必要です。

3 7月27日に東京大学は、2027年の開学150周年記念事業に向けた1回目の「カウントダウンイベント」を行うと伺っております。150周年を回顧するというのであれば、「帝国大学」として、植民地主義的学知を担い続けてきた歴史を自己批判的に問い直す視点は、学術倫理・学問的誠実さに鑑みても、不可欠のものであるはずです。渤海の文化財をはじめ、東大が不当な手段で入手し、今なお所蔵し続けている全ての「学術史資料」の存在と、それがもたらされた由来とを明らかにし、本来の所有者にそれを返還することによって、東大はその姿勢を示してください。

4 以上の点について、私たちは、ぜひ貴大学・貴機関の見解を、直接お尋ねしたいと思っています。貴大学・貴機関と正式に面談の機会を設けていただけますよう、願っております。私たちの代表と貴大学・貴機関のご意向を伺いたく存じます。どうぞ、よろしくお願い申し上げます。

山西省訪問記

一瀬 敬一郎

今年8月私は山西省を初めて訪れた。8月11日に北京を出発して山西省大同市に2泊3日滞在し北京に戻ったが、12日に大同で「雲崗石窟」を見学した。

11日午前10時頃北京北駅から鉄道に乗って大同に向かった。2時間後の正午頃大同駅のホームに降りた。北京と比べ随分ひんやりした感じがした。“夏でも快適なところ”というのが私が受けた大同の第一印象だ。ネットで調べると、大同は北京よりも平均標高で1300メートル余り高く、気温は4、5度低い。

山西省も日中戦争で甚大な被害を被っている（「戦時性奴隷」「毒ガス戦」「治安戦（三光作戦）」「炭鉱現場の万人坑」等）。また日本陸軍は山西省運城の飛行場を重慶大爆撃の出撃地として使っていた。また山西省は有名な「平型関戦闘」（1937年9月）や「百団大戦」（1940年8月から12月）の現場でもあった。

11日大同に着いた直後、まず昼食をとるために小さな食堂に入り、本場の刀削麺を食べた。食後は城壁の周囲をぶらぶら歩き、また有名な「九龍壁」や古い寺を数カ所見て回った。

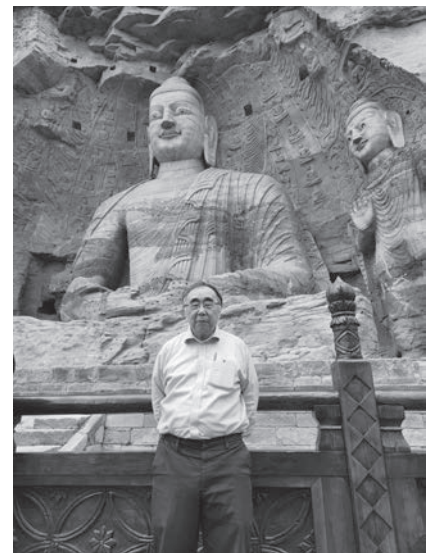
翌12日の午前中から雲崗石窟に向かったが、観光客が多いのに驚いた。入口から石窟のある場所まで距離があるので20人ほどが乗れる簡易な移動車がピストン輸送しているのだが、その順番待ちに時間がかかった。よ

うやく石窟がずらっと並んでいる所まで辿り着いても石窟の中に入って仏像を見ようとすると他の見学者と身体を押し合わなければ入れないほどの混雑だった。石窟の中の仏像を写真撮影しようとしても人の頭が邪魔になって良い写真は撮りにくい。有名な「第20窟」の大きな仏像の前で、写真を撮ってもらった。

今回の雲崗石窟の見学では、個々の石窟の詳しい説明を受ける機会はないまま、全体をざーっと見て回っただけである。1つの

石窟にはメインの大型の仏像が1つか2つあり、その周りの壁や天井に無数の小さな仏像が造られていることは頭に入った。

雲崗石窟を見た帰りに、仏像のレプリカを造って観光客に販売している店に入った。中国茶をご馳走になりながら、店主



の郭文敬さんから、雲崗石窟から略奪された仏像が日本の「大阪市美術館」に展示されている事実を教えて貰った。また郭さんから雲崗石窟の仏像略奪に関する趙昆雨さん（現在「雲崗石窟博物館」の館長）が書いた論文をWechatに送ってもらった。

帰国してから翻訳して貰うと、その論文は「雲崗から流出した造像に関する4つの考察」というもので、趙昆雨さんは結論で次の点を指摘している。

- ①雲崗石窟の造像が盗まれたのは主に1907年から1934年の間で、特に1918年から1929年の間が最も猖獗を極めた。
- ②盗まれた造像は100点以上にのぼる。現在は主に日本、フランス、アメリカ、ドイツ等の国々に分布しているが、日本が最も多く全体の流出造像の約65パーセントを占めている。
- ③欧州やアメリカに流出した雲崗の造像も多くは日本の古美術商を経て転売されたものである。

「雲崗石窟」は、「龍門石窟」（河南省洛陽市）や「莫高窟」（甘粛省敦煌市）と並ぶ石窟で、これら3つの石窟は中国三大石窟と呼ばれ、3つとも世界遺産に登録されている。

これら三大石窟の仏像は、どれも相当数の像が首から上を削り取られ略奪されている。山西省の石窟は雲崗石

窟の他に「天龍山石窟」があるが、ネットで調べるとこの石窟の略奪被害は一番酷いらしい。私は次回の山西省訪問の際には是非とも天龍山石窟を訪れたいと考えている。

最後に一言。中国文化財返還問題を考える時、石窟寺院から首から上を削り取って略奪した仏像の存在は非常に残酷で大問題である。石窟から略奪された仏像の頭部をそのまま放置することは許されないと思う。「中国文化財返還運動を進める会」では「石窟から略奪された仏像問題」を新たな調査研究の課題にする必要がある。

「返還運動を進める会」は、できるだけ早い時期に雲崗石窟から略奪された仏像を保管している大阪市美術館に対して、また、天龍山石窟から略奪された仏像を保管している根津美術館等に対して、返還請求を突きつける必要があると思う。

更に東京国立博物館に対しても、石窟寺院から略奪された疑いのある仏像を特定して返還請求を突きつけるべきだろう。

私見だが、「返還運動を進める会」は、「石窟寺院から略奪された疑いのある仏像」については、特定でき次第、これら略奪文化財を保管している美術館や博物館に対して「中国文化財」の「もとあった場所（石窟寺院）」への返還請求を突きつけていくべきだと考える。

碧玉屏風

森本 和男

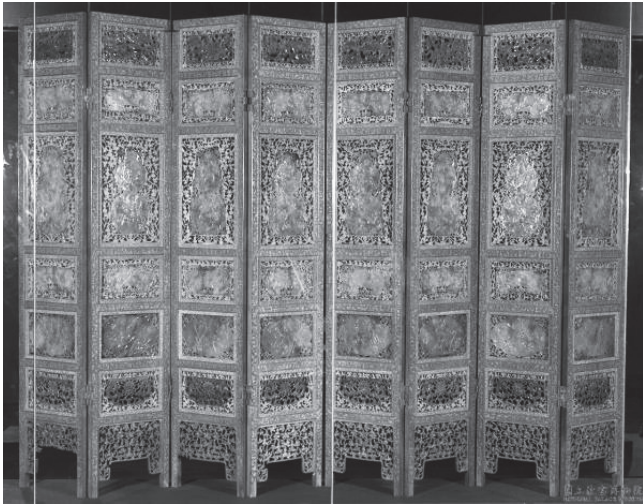
台湾の台北故宮博物院に碧玉屏風（以前は翡翠屏風と呼称）が展示されている。高さ約190cm、幅約2.4mで48枚の碧玉で作られている。同じく碧玉製の白菜を模した翠玉白菜や、豚の角煮を模した肉形石とともに故宮博物院で人気の展示物である。この碧玉屏風は、日本の傀儡政権だった南京国民政府の首班汪精衛（汪兆銘）が、1941年6月の訪日の際に天皇に寄贈し、戦後になって中華民国に返還された国家的財宝である。

つまり日本の天皇への贈品、そして中国へ返還された略奪財産だったのだ。この歴史的事実は、台湾や中国大陸で広く知られているようだが、日本ではほとんど知られていない。そもそも戦後アメリカ軍（GHQ）占領下で、戦争で奪われた文化財が皇居で見つかり、略奪文化財として原産地に返還されたという事実が、日本でまったくいってよいほど知られていない。

1937年7月に盧溝橋事件が勃発し日本軍による大規

模な侵略がはじまった。同年12月に首都南京が陥落して大虐殺がおきたが、中国側は徹底抗戦をかけたが、日本は停戦の機会を失って泥沼の戦争へと突入していった。何とか1940年に汪精衛を首班とする傀儡政権が成立した。そして汪精衛は翌年1941年6月に日本を公式訪問し、日本各地で熱烈に歓迎された。6月18日に宮中に参入して昭和天皇に拝謁、天皇から日中間の「真の提携」を願うとの言葉をかけられたという。19日には近衛文麿首相主催の晩さん会にのぞんだ。

6月19日付朝日新聞夕刊によると、汪は宮中に参入した際に、天皇に四曲一双の黒檀の屏風、皇后に青玉の花瓶、皇太后に白玉の花瓶を呈上したと報じている。新聞に記された天皇および皇后への贈品が、現在故宮博物院で展示されている碧玉屏風と、翡翠雕花鳥瓶に相当すると考えられる。白玉の花瓶は不明。さらに新聞記事では、屏風は清朝の宮廷に伝わり、李鴻章の手をへて国民



画像出典：「故宮典藏資料検索」(<https://digitalarchive.npm.gov.tw/>)
内の「玉屏風」図

政府に所蔵されたと記している。あるいは故宮博物院コレクションの一部だったのかもしれない。確たる由来は判然としない。

新聞で公然と報道されるほど天皇への贈品はとても貴重な財宝だったので、当然重慶政府は存在を察知していただろう。また傀儡政権内部でも訪日記録のなかに贈品目録が記されていた可能性が十分考えられる。戦後1948年1月13日に中国返還賠償代表団は、国際軍事法廷のために外務省で押収された汪精衛訪日記録『国民政府首席汪兆銘来朝関係一件』を根拠に、3点の玉製品の返還をGHQ民間財産管理局(CPC)に要求した。これらの土産物は中国の国宝であり、汪精衛は傀儡政権の名前で贈ったのだから、政府の所有物と見なすことができ

る。したがって代表団は返還を求めると伝えた。

そしてGHQは同年2月27日付SCAPIN 5313-A指令で、皇室にあるjade screen、pair of jade vases、white jade potを3月11日に中華民国政府へもどすように日本政府に命令して、玉製品が返還されたのである。その後蒋介石の中華民国は台湾にわたり、天皇への贈品だった玉製品も台北故宮博物院で展示されているのだ。

戦争で奪った文化財を戦利品として天皇に贈り、戦後皇室から返還されたという歴史的事実を知る日本人は、ほとんどいないだろう。たとえば、1942年にインドネシア(旧オランダ領東インド)のバンドンの調査機関にあった古人類化石ソロ人の頭骨が、天皇へのプレゼントとして持ち出され、東京へ移送されて皇居の生物学御研究所におかれていた。戦後頭骨化石はオランダに返還され、アメリカに渡ったオランダ人研究者へ1946年に渡された。

その後ソロ人頭骨は、1967年にインドネシアのジャクジャカルタのガジャマダ大学に移され、大学では、人類学教授が最初の講義でいつも天皇に贈られた化石の話をしたという。被害国インドネシアでは、天皇へのプレゼントとしてソロ人頭骨が略奪されたことが周知されているが、加害国日本では一向に知られていない。碧玉屏風と同じような状況といえるだろう。

戦後天皇の戦争責任は不問にされ、また同時に文化財に関する戦争責任、植民地責任もまったく議論されなかった。近年欧米では文化財問題が真摯に討議され、文化財返還も続々と実現している。一方、戦争責任、植民地責任を省みない日本では、文化財を略奪したという歴史的事実すら知られていないのである。

中国文化財返還を大きなうねりに！ 12.7集会

日本の各地に、中国から不当に持ち出された大量の収奪文化財があります。これらはすべて、日本政府および現在の所有機関などの責任で、一刻も早く「元あった場所」に返還されなければなりません。

今回の集会では、文化財返還問題の根幹といえる「(脱)植民地主義」の問題に、あらためて焦点を当てていきます。民族問題研究者であり、国際問題や文化・思想、社会運動などの分野で広く活発な言論活動を行っている太田昌国さんと、中国の流出文化財の専門家であり、昨年刊行された『離家的国宝』など多くの著作のある陳文平さんにお話ししていただく予定です。

多くの方のご参加をよろしく申し上げます。

とき ● 2024年12月7日(土)

13時30分開場 / 17時30分終了予定

ところ ● 日本キリスト教会館4F

(地下鉄メトロ早稲田駅5分・JR高田馬場駅から
早大正門行バス・西早稲田バス停下車3分)

*早稲田奉仕園・アバコブライダルホール等と同じ敷地です。

講演1 ● 「脱植民地主義と文化財返還の意味」

…太田昌国さん(民族問題研究)

講演2 ● 「中国流出文化財の回収・返還の理論と実践」

…陳文平さん(上海大学中国海外文物研究センター教授)

*資料代 800円